徳島大学総合科学部 人間科学研究
第 29 巻 (2021) 47-58

乳幼児のオノマトペと成人語の使用と理解の発達：保護者への意識調査と保育場面の観察を通して

石本 麻奈 [1]　　山本 真由美 [2]

The development of use and comprehension of onomatopoeia and adult words in infant: through a survey of parents' attitudes and observations of childcare settings.

Mana ISHIMOTO [1]　Mayumi YAMAMOTO [2]

Abstract

The purpose of this study is to investigate the use and comprehension of onomatopoeia (Study1), the tendency to use onomatopoeia and adult words (Study2) in infants and toddlers and the actual situation of onomatopoeia use in childcare settings(Study3). The results of Study1 revealed that the frequency of onomatopoeia reached its peak at two years of age, and the level of semantic comprehension increased with age, and the frequency of adult language use increased and the frequency of onomatopoeia use decreased with age (Study2). In Study3, it was observed that when the teachers used onomatopoeia, they spoke to the infants with onomatopoeia as well as with actions at the same time, and that the infants understood the teachers' intentions. Through these investigations, the usefulness of the use of onomatopoeia was discussed.

Keywords ：Infant, onomatopoeia, adult language, observation of childcare situations

[1] 島根あさひ社会復帰促進センター
Shimane Asahi Rehabilitation Program Center
[2] 徳島大学大学院社会産業理工学研究部
Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University

問題と目的

「オノマトペ」はフランス語に語源をもち，「命名する」というギリシャ語に由来する擬音語・擬声語・擬態語の総称を指すことばである。田守（2002）は，擬音語･擬声語･擬態語を以下のように説明している。擬音語は，声以外の自然界の物音を真似て作られ，「どんどん（戸を叩く）」「ごろごろ（雷が鳴る）」といったものである。擬声語は，動物の鳴き声や人間の声を模写して作られた語で，「わんわん（鳴く）」「げらげら（笑う）」などがある。擬態語は，事物の状態・動作・痛みの感覚・人間の心理状態等を象徴的に表したものである。「にこにこ（笑う）」「ぴかぴか（光る）」などがそれに当たる。

丹野（2005a）において，オノマトペは「漫画・コマーシャル・童話・新聞記事などのメディアにしばしば登場し，ことばの世界を豊富にしてくれている。加えて，文学の世界にも進出し，オノマトペ特有の造語力をいかんなく発揮し，作品に彩をそえている」と紹介している。特別支援教育場面（高野・有働 2007, 2010），介護場面（細馬，2017；平田・小林・福田，2018），医療場面（植田,2015)），運動スポーツ場面（藤野・井上・吉川・仁科・山田，2005；吉川 2013）などにおいてオノマトペ利用についてのさまざまな研究が行われている。丹野（2005b）は，日常場面において子ども,特に言語発達途上にある幼児や保護者,保育者といった子どもの周囲の人々は，オノマトペを多用する傾向にあると報告しており,オノマトペは乳幼児のことばの発達と深く関わっていることが伺える。

乳幼児が用いることばは幼児語と呼ばれ,大辞泉（小学館,2009）によると 2 つの意味が含まれている。1 つ目の意味は，「幼児期に特有の語彙。犬を『わんわん』，食べものを『うまうま』という類」，2 つ目の意味は，「幼児期にみられる不完全な言語。『飛行機』を『こうき』と言う音の脱落，『猫が来た』を『ねこ，きた』という助詞の脱落等の類」と説明されている。大辞泉の 1 つ目の意味で「犬を『わんわん』」という例が挙げられている。これは犬の鳴き声を表した擬声語であり，オノマトペに当たる。一方，大辞泉の 2 つ目の意味については，乳幼児の構音器官の未成熟さや文法能力の未熟さから来るものであり，これらは幼児音に当たると考えられる。このように，一般的に幼児語と言われていることばには，オノマトペと幼児音の両方が含まれている。

文部科学省（2008）の幼稚園教育要領において，「声として発せられた音声の響きやリズムには,音としての楽しさや美しさがある。例えば，『ゴロゴロ　ゴロゴロ』というようにことばの音を繰り返すリズムの楽しさや『ウントコショ　ドッコイショ』というようなことばの音の響きの楽しさ等がある。ことばを覚えていく幼児期は，このようなことばの音がもつ楽しさや美しさに気付くようになる時期でもある」と記されている。

厚生労働省（2018）の保育所保育指針の保育内容に「言葉」の領域がある。その中で，保育士が擬音語や擬態語を口にすることで乳幼児のことばの感覚が豊かになり，乳幼児自身がことばを使用しようとする意欲を高めることにつながるなど，保育士が擬音語・擬態語等のオノマトペを使用することの重要性についても触れられている。原子・奥野（2007）は，幼稚園の保育活動において，年少児・年中児・年長児および各クラス担任・養護教諭を調査協力者とし，オノマトペの実態調査を行った。保育活動の内容は，a）絵画および制作指導，b）リズム運動，c）歌唱，d）保健指導の 4 つであり，各場面の観察を行った。その結果，歌唱の場面において歌詞に出て来るオノマトペを口ずさみながら，生き生きと楽しんで歌っている幼児の姿が確認されたこと,絵画および制作指導の場面で方法を説明する時やものの操作をする時にオノマトペが多用

されていたこと，リズム運動で動きの状態を表す時に動作とオノマトペが併用されていることが多かったこと，保健指導で体の部位の名称や動かし方の説明（例：「おロアーンして」）にオノマトペが使用されていたこと，使用されたオノマトペに対する幼児の反応はいずれも動作が滞ることなくスムーズでよく理解できていたこと等が報告され，保育者や保護者が乳幼児に対して擬音語・擬態語等のオノマトペを使用することの重要性が覗える。

本研究では，0 歳から 6 歳の乳幼児のオノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語）の使用状況とその意味理解状況，オノマトペと成人語（大人の使用することば）の使用傾向を乳幼児の保護者への質問紙調査で実施すること，保育場面におけるオノマトペ使用を実態調査すること，すなわち，保育士と保育園児を研究協力者とし，1 歳から 5 歳児の各クラスにおいて一斉保育活動の時間を対象に参与観察を行い，保育場面において保育士がオノマトペと成人語をどのように使用しているのか，使用したオノマトペに対して保育園児がどのように反応するのかを検討することを目的とする。

研究 1

目　的

小椋（1999）は，12 ヵ月から 27 ヵ月の日本語獲得児における語彙と文法の発達調査を目的とした横断的研究を行った。この調査では，乳幼児の用いる幼児語と成人語に焦点を当て，発話数や異なり語数（同一のことばが出て来た場合，そのことばが何度出て来ても 1 語とし，全体で出て来たことばの数を数えたもの）を分析した。その結果，幼児語異なり語数は 15 ヵ月から増加し，24 ヵ月でピークに達したこと，24 ヵ月から 27 ヵ月にかけて減少したことが報告された。オノマトペの使用頻度に関する仮説として 1 歳を過ぎた頃から増加し，2 歳でピークに達すると考えられる。村田（1977）は，言語理解と認知機能は相互に関連しており，外界についての子どもの構成概念が言語獲得にとって必要な発達的基礎であると述べている。また，小林・佐々木（1997）は，認知能力の中でも特に象徴機能の発達が，ものの意味の獲得を可能にすると記している。象徴機能とは，ある対象をそれとは全く異なるものを使用して表現する機能のことで，2 歳頃から発達し始め，7 歳頃までに獲得される。

研究 1 では，日常生活で乳幼児がオノマトペをどの程度使用しているか(使用頻度)，オノマトペの意味をどの程度理解しているか（意味理解度）について，保護者を対象に調査し，その傾向を知ることを目的とした。この研究は 2013 年度 A 大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

方　法

調査協力者　A 市内の 14 ヵ所の保育所に通う乳幼児（0 歳～6 歳児）の保護者 1,208 名であった。

調査実施期間　2013 年 9 月 2 日（月）から 9 月 20 日（土）の間に質問紙調査用紙の配布回収を行った。

調査方法　質問紙調査を実施した。質問紙を各園の担任から保護者に降園時に配布してもらい，回収は，各保育所内に設置した質問紙調査用紙回収箱に保護者が直接投函する形で行った。配布から 2 週間後に調査実施者が回収箱を各保育所から回収した。質問紙調査用紙に記入，それを回収箱に投函することで同意を得たとした。

質問紙構成　28 語のオノマトペについて，使用頻度と意味理解度を尋ねた。使用頻度は，0 わからない，1 まったく使わない，2 あまり使わない，3 ときどき使う，4 よく使う，の 5 件法で回答を求めた。意味理解度は，1 まったくわかっていない，2 あまりわかっていない，3 少しわかっている，4 よくわかっている，の 4 件法で回答を求めた。28 語のオノマ

トペは，田中（2012）の質問紙を基に，A の方言に合うよう保育士と相談，修正したものを使用した。使用語は，1.がーがー（あひる），2.がおー（ライオン），3.こけこっこ（にわとり），4.ぽっぽー（汽車）5.にゃんにゃ（ネコ），6.ぶーぶー（車），7.めーめー（羊），8.もー（牛），9.わんわん（犬），10.えんえん（泣く），11.かーかー（カラス）12.ぐるぐる，13.ぶらんぶらん，14.ごっつん，15.じゃー（水などをこぼす音），16.しーし（おしっこ），17.おっちんする（おすわり），18.ちゅーちゅー（ねずみ），19.とっと（鳥），20.ちょきちょき（はさみ），21.ぱかぱか（馬），22.かみかみ（食べる時），23.ぴよぴよ（ひよこ），24.ぶーぶー（豚），25.ぶーん（飛行機），26.ぽい（なげる），27.ぽんぽん（おなか），28.びんび（魚）であった。加えて，フェイスシート（乳幼児の性別，年齢）を含めた。

結　果

回収率は 44.6%，有効回答率は 97.2%であった。集計に用いた総数は，525 名（男児 293 名，女児 232 名）であった。年齢別内訳は，0 歳児 9 名，1 歳児 78 名，2 歳児 114 名，3 歳児 110 名，4 歳児 99 名，5 歳児 79 名，6 歳児 36 名であった。28 語のオノマトペ使用頻度の平均点に違いがあるかを検討するため，年齢と性別を 2 要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられ，等分散性が仮定されなかった（$F(13, 510)=2.692$, $p<.001$）。そこで，性別と年齢をそれぞれ 1 要因とする 1 要因分散分析を行った。平均点について性別を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差はみられなかった（$F(1,522)=1.903$, n.s.）。そのため，分散分析を続けたが，有意差はみられなかった（$F(1,522)=.002$, n.s.）。オノマトペの使用頻度に男女差はないという結果が得られた。男女を込みとし，年齢を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた（$F(6,518)=4.938$, $p<.001$）。等分散でないと仮定し，ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った結果，年齢間で有意差がみられた（$\chi^2=147.6$, $df=6$, $p<.001$）。このことから，年齢によってオノマトペの使用頻度に違いがあるという結果が得られた。各年齢における使用頻度の中央値は，Figure1 の通りである。年齢と平均点についてペアごとに比較を行った。オノマトペの使用頻度は，1 歳頃から増加し始め，2 歳でピークに達すること，3 歳以降減少すること，0 歳，5 歳，6 歳はほとんど使用しないことが明らかとなった。

オノマトペ意味理解度の平均点についてもオノマトペ使用頻度と同様の分析を行った。年齢と性別の 2 要因分散分析に等分散性が仮定されなかった（$F(13,507)=9.379$, $p<.001$）。

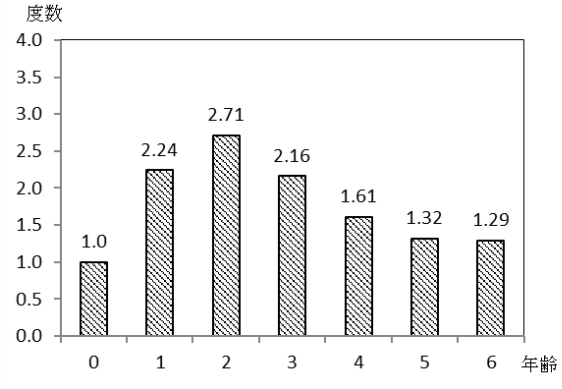

Figure1. 各年齢におけるオノマトペ使用頻度の中央値

性別を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，性別によって意味理解度に差は見られなかった（$F(1,519)=.003$, n.s.）。そこで，男女を込みとし，年齢を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において等分散でないと仮定され（$F(6,515)=18.718$, $p<.001$），ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った結果，

年齢間で有意差がみられた（χ^2＝164.573，df＝6，p＜.001）。オノマトペの意味理解度にも年齢によって違いがあるという結果が得られた。各年齢における意味理解度の中央値は，Figure2 の通りである。続いて，どの年齢間でオノマトペの意味理解度に違いがあるのかを明らかにするため，年齢と平均点についてペアごとの比較を行った。その結果，0 歳が最も低く，1 歳で増加し始め，その後は年齢が上がるごとに上昇し，5 歳でピークに達することが明らかとなった。

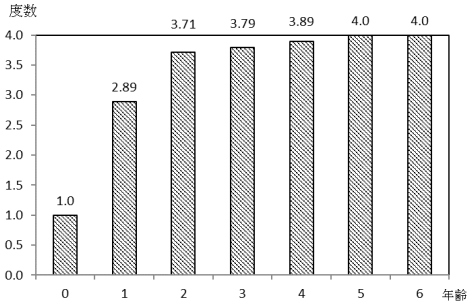

Figure2　年齢別オノマトペ意味理解度の中央値

考　察

オノマトペの使用頻度について 調査の結果, 1 歳から増加し始め, 2 歳でピークに達し, 3 歳以降減少すること，0 歳，5 歳，6 歳はほとんどオノマトペを使用しないことがわかった。本研究の結果は，小椋（1999）と一致している。一般的な乳幼児の言語発達では, 1 歳半から 2 歳の時期に語彙が爆発的に増えることが知られている（大久保，1981，小田・芦田，2013）。構音器官発達の未熟な乳幼児にとって，オノマトペは構音しやすいため，使用頻度の増加につながったと考えられる。5 歳から 6 歳にかけては,「大人ことば模倣期」であり, 大人の使用することばに興味を持ち, そのことばを真似して使用する時期である。また, オノマトペ自体が「やや子どもじみた, 幼稚なことば」と過小評価されてきた歴史もあり（高野・有働，2007），就学を控えた 5・6 歳児に対して周囲の大人が成人語を使用するように声掛けしているために，オノマトペの使用頻度が低くなった可能性がある。

オノマトペの意味理解度について オノマトペの意味理解度に関して 0 歳は最も低く，年齢が上がるごとに増加し，5 歳でピークに達することがわかった。一般的な乳幼児の言語・認知発達において，0 歳から 1 歳の時期は，象徴機能の獲得が始まることによって，多くの乳幼児が初語を獲得する時期である。しかし，この時期に獲得される表象は，目の前にある対象と完全に切り離されている訳ではなく，感覚や知覚の影響を受けやすい。そのため，ことばとものの意味との対は完全にできておらず，1 つの単語に様々な意味を含んでいる。1 歳半前後に表象と表象を組み合わせた 2 語文を使用できるようになり，表象も徐々に安定したものとなる。そして，2 歳前後になると，表象としての自立性が強まってくる。そのため，イメージしたものをことばでも表現できるようになる。このように，0 歳後半から 2 歳にかけて表象の獲得が進んでいることから，2 歳になる以前にオノマトペの意味理解が進んでいたものと考えられる。

研究２

目　的

研究 1 でオノマトペの使用頻度は，2 歳でピークに達し，3 歳から減少し始め，5・6 歳ではほとんど使用しない結果となった。オノマトペの意味理解度は，年齢が上がるごとに理解が進み，5・6 歳児では質問紙で使用した 28 語全ての意味を理解していることが明らかとなった。このことから，オノマトペが何を指しているのかという理解が進むにつれてオノマトペの使用は減り，そのオノマトペに対応する成人語が獲得されている可能性が考えられる。

小椋・村瀬・山下（1992）は，日本語版語彙チェックリスト（小椋・山下・村瀬，1991）を用いて, 8 ヵ月から 36 ヵ月の乳幼児におけ

る幼児語から成人語への移行を調査した。その結果，21 ヵ月から 24 ヵ月頃に幼児語から成人語への移行転換期があり，総語彙数に占める成人語の割合は 21 ヵ月で 38.0%，24 ヵ月で 60.8%，さらに，36 ヵ月では 96.2%に達することを報告した。

そこで，研究２では，オノマトペ使用減少に伴い，そのオノマトペに対応する成人語使用が増加するのかというオノマトペ使用から成人語使用への移行について調査することを目的とした。この研究は 2013 年度 A 大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

方　法

調査協力者　A 市内の 14 ヵ所の保育所に通う乳幼児（0 歳～6 歳）の保護者 1,246 名であった。

調査実施期間　2014 年 9 月 6 日（土）から 9 月 20 日（土）の間に質問紙調査用紙の配布回収を行った。

調査方法　研究１と同様の方法で質問紙調査を実施した。

質問紙構成　研究１と同様の 28 語のオノマトペを使用し，オノマトペの使用頻度と成人語の使用頻度について 5 件法で回答を求めた。なお，研究１で使用した 28 語のオノマトペの中に成人語を併記していない語が 3 語あったため，追記した（12.ぐるぐる（まわす・まわる），13.ぶらんぶらん（ゆらす・ゆれる），14.ごっつん（ぶつかる・ぶつける））。さらに，フェイスシート（乳幼児の性別，年齢）を加えた。

結　果

回収率は 38.6%，そのうちの有効回答率は 98.1%，472 名（男児 273 名，女児 199 名）であった。年齢別内訳は，0 歳児 4 名，1 歳児 51 名，2 歳児 88 名，3 歳児 113 名，4 歳児 110 名，5 歳児 74 名，6 歳児 32 名であった。研究１と同様，オノマトペ使用頻度の平均点に違いがあるかを検討した。Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられ，年齢と性別の 2 要因について等分散性が仮定されなかった（$F(12, 449)=3.765$，$p<.001$）。そこで，性別と年齢をそれぞれ 1 要因とする 1 要因分散分析を行なった。平均点について性別を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられず（$F(1, 460)=2.291$, n.s.），分散分析にも有意差はみられなかった（$F(1, 460)=.011$，n.s.）。オノマトペの使用頻度に男女による違いはないという結果が得られた。年齢を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられ（$F(6, 455)=6.450$, $p<.001$），等分散でないと仮定し，ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果，年齢間で有意差がみられ（$\chi^2=111.986$，$df=6$, $p<.001$），オノマトペの使用頻度に年齢による違いがあるという結果が得られた。どの年齢間でオノマトペの使用頻度に違いがあるのかを明らかにするため，平均点について各年齢でペアごとの比較を行った。オノマトペの使用頻度に関して，0 歳から 1 歳にかけて増加し，2 歳でピークを迎え，3 歳から減少していくことがわかった。オノマトペの使用頻度については研究１でも 1 年前に実施している。オノマトペの使用頻度について研究１と研究２の結果をノンパラメトリック検定の Mann-Whitney 検定を用いて比較検討した。その結果，研究１と研究２の結果にどの年齢においても有意差はみられなかった（Figure3）。

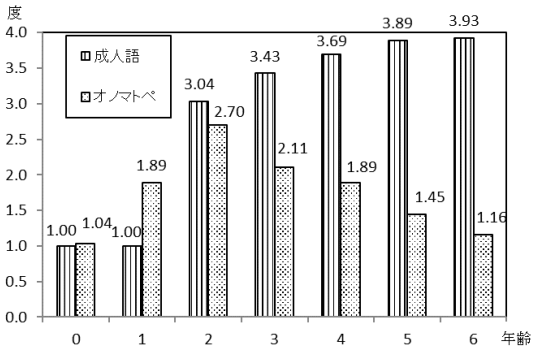

Figure3　オノマトペと成人語の使用頻度の中央値の推移

成人語使用に違いがあるかを検討するため，年齢と性別を 2 要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられ，等分散性が仮定されなかった（F（12, 454）＝11.301, p＜.001）。そのため，性別と年齢をそれぞれ 1 要因とする 1 要因分散分析を行なった。平均点について，性別を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差はみられた（F（1, 465）＝11.845，p＜.001）ため，ノンパラメトリック検定の Mann-Whitney 検定を行ったが，有意差はみられなかった（U＝27, 816.5, n.s.）。成人語の使用頻度に男女による違いはないという結果が得られた。年齢を 1 要因とする 1 要因分散分析を行った結果，Levene の誤差分散の等質性検定において有意差がみられた（F（6，460）＝9.936，p＜.001）ため，等分散でないと仮定し，ノンパラメトリック検定の Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果，年齢間で有意差がみられる結果となった（χ^2＝200.738，df＝6，p＜.001）。成人語の使用頻度に年齢による違いがあるという結果が得られた。各年齢における成人語の使用頻度の中央値は，Figure3 の通りである。続いて，どの年齢間で成人語の使用頻度に違いがあるのかを明らかにするため，平均点について各年齢でペアごとの比較を行った。成人語の使用頻度に関して，0 歳と 1 歳が最も少なく，2 歳で大きく増加し，その後年齢が上がるごとに使用頻度が増加することがわかった。

各年齢において，オノマトペと成人語の使用頻度に差がみられるかどうかを Wilcoxon 検定で検討した。その結果，0 歳では差がみられなかった。1 歳以降では有意差がみられた（1 歳：z＝－5.333，p＜.001；2 歳：z＝－2.165，p＜.030；3 歳：z＝－9.121，p＜.001；4 歳：z＝－7.770，p＜.001；5 歳：z＝－6.681，p＜.001；6 歳：z＝－4.939，p＜.001）。1 歳は，成人語よりもオノマトペを多用しているが，2 歳以降は，オノマトペよりも成人語をよく使用していることが明らかとなった（Figure3）。

考　察

0 歳では，オノマトペと成人語の使用頻度に差がないことがわかった。1 歳では，成人語よりもオノマトペを多用しているが，2 歳以降は，オノマトペよりも成人語をよく使用していることが明らかとなった。本研究でも小椋ほか（1992）の調査結果と同様の結果が得られ，2 歳頃オノマトペから成人語への転換期があると言える。小椋ほか（1992）の調査は，調査協力者の年齢が 36 ヵ月までであり，それ以降の年齢については検討されていなかった。村瀬・小椋・山下（2007）は，養育者が子どもに用いる育児語（擬音語・擬態語，音韻の反復，接尾辞「さん」「ちゃん」「くん」を付加するなど）の使用傾向について 16 ヵ月から 27 ヵ月の子どもをもつ保護者を調査協力者とし，調査を行った結果，子どもの月齢が上がるにつれて育児語の使用は減少していることが明らかにしている。これらの結果は，本研究の結果と一致している。これは，オノマトペ自体が「やや子どもじみた，幼稚なことば」というイメージがあることから年齢が上がるにつれて，周囲の大人が成人語を使用するように声掛けしているために，オノマトペの使用頻度が低くなったことと関

係していると考えられる。

研究３

目　的

小椋ほか（1992）は，幼児語から成人語へ移行する背景として，「子どもの認知能力の発達の他に，親のことばかけが子どもの言語表出に大きな影響をあたえる」と述べている。村瀬ほか（2007）は，子どもの月齢が上がるにつれて育児語の使用は減少していることを明らかにしているが，乳幼児側の変数と母親の育児語使用傾向との直接的な関連性を検討していないことを課題として取り上げている。近藤・渡辺（2008）は，幼稚園の年中児およびクラス担任を調査協力者とし，自由保育活動場面における保育者のオノマトペ使用の実態調査を行った結果，動作に関するオノマトペが多用されており，「幼児が行為を容易にイメージできる，何をすべきか容易に理解できることにつながっていた」と報告している。しかし，調査協力者が年中児のクラス担任のみであり，年長児・年少児に対する保育者のオノマトペの使用傾向は明らかとなっていない。そこで，研究３で保育場面において保育士がどのようなオノマトペを使用しているのか，保育士が使用したオノマトペに保育園児がどう反応するかという保育場面におけるオノマトペの使用実態を調査することを目的とした。この研究は 2014 年度 A 大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

方　法

調査協力者　A 市内の B 保育園に通う保育園児（116 名）とクラス担任の保育士（16 名）であった。

調査実施期間　普段の保育場面と変わらない自然な状態で観察を行うため，保育園児が観察者に慣れるための期間を設けた。2014 年 10 月中旬から 11 月上旬にかけて，観察者は各クラスの保育場面を見学し，自由遊びの際には活動への参加も行った。観察･記録は，2014 年 11 月 18 日（火），19 日（水），21 日（金），25 日（火），27 日（木），12 月 12 日（金）に実施した。

観察場面　保育園児の約 8 割が揃って活動する一斉保育活動場面を対象とした。

観察・記録方法　観察事態は自然観察法，観察形態は参加観察法，観察技法は事象見本法で実施した。一斉保育活動中の保育士・保育園児の音声は，IC レコーダーで録音した。保育士が使用したオノマトペとそれに対する保育園児の反応は，事象見本法により観察・記録用紙へ記入した。保育士の使用したオノマトペに対する保育園児の反応については，事象見本法で行い，デジタルカメラでの撮影も行った。1 クラスの保育園児全員が行動観察の協力者となるため，記録は調査者である第 1 著者，及び第 2 著者の研究室に所属する学部 4 年生のうち，観察記録方法のトレーニングを予め受けた 3 名の計 4 名で行った。

分析手法　一斉保育活動中に使用されたオノマトペと保育園児の反応について，IC レコーダーに録音した保育士の声を文字化し，トランスクリプトを作成した。保育園児の反応については，観察記録用紙に記入した内容とデジタルカメラで撮影した写真を基に，観察者全員で話し合いを行い，まとめた。

トランスクリプトを基に，オノマトペ総数（同じオノマトペが複数回登場している場合も，その都度計数），異なりオノマトペ数（複数回使用されたオノマトペを 1 語として計数），オノマトペと成人語の対提示数（例えば，「チョキチョキ，切ってね」等，オノマトペと一緒に成人語も付け加えられている数）を分析した。また，得られたオノマトペは石橋（2007）のオノマトペ 4 分類（音を表現，動きを表現，状態・感覚を表現，内的状態・感覚を表現）に名詞を付け加えた 5 分類で実施した。

結　果

観察・記録時の各クラスの保育園児と保育士の人数の内訳は, 1 歳児 15 名, 保育士 4 名, 2 歳児 20 名，保育士 5 名，3 歳児 30 名，保育士 2 名，4 歳児 23 名，保育士 3 名，5 歳児 28 名，保育士 2 名であった。観察した一斉保育活動の概要は Table1 に示した通りであった。

Table1　観察・記録した一斉保育活動の概要

	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
時間	午前のおやつ後の集まり	午前のおやつ後の集まり	午睡前の集まり	午睡前の集まり	午睡をしない時間に行う集まり
	(9:20～9:43)	(9:13～9:32)	(12:01～12:21)	(12:20～12:41)	(12:30 ～13:15)
活動概要	手遊び	手遊び	歌唱	手遊び	制作
	絵本の読み聞かせ	パネルシアター	手遊び	絵本の読み聞かせ	
		紙芝居の読み聞か	紙芝居の読み聞か		

オノマトペ総数と異なりオノマトペ数，オノマトペと成人語の対提示数を各年齢でまとめたのが，Table2 である。オノマトペ数は, 4 歳児クラスが 64 語と最も多く, 次いで 1 歳児クラスの 42 語であり, 5 歳児クラスは 3 語のみであり最も少なかった。異なりオノマトペ数は, 3 歳児クラスと 4 歳児クラスが 28 語と最も多く, 5 歳児は 3 語で最も少なかった。オノマトペと成人語の提示数は，1 歳児と 5 歳児で 1 回ずつみられたのみで，他の年齢では使用されていなかった。

Table2　各年齢におけるオノマトペ総数, 異なりオノマトペ数, オノマトペと成人語の対提示数

数＼年齢	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
オノマトペ数	42	37	35	64	3	181
異なりオノマトペ数	21	25	28	28	3	105
オノマトペと成人語の対提示数	1	0	0	0	1	2

各年齢におけるオノマトペ５分類別使用数を Table3 にまとめた。オノマトペ５分類では, 動きを表現するオノマトペが 105 回と最も多く, 次いで音を表現するオノマトペが 87 回であった。内的状態・感覚を表現するオノマトペは 1 回も使用されていなかった。年齢別オノマトペ使用数は, 4 歳児が 88 回と最も多く, 次いで 3 歳児の 61 回であり, 1 歳児と 2 歳児は 47 回, 46 回であり, 5 歳児は 5 回と最も少なかった。

Table3　年齢別オノマトペ５分類別使用数

分類＼年齢	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
① 音を表現	12	17	26	32	0	87
② 動きを表現	23	21	26	33	2	105
③ 状態・感覚を表現	2	3	8	22	3	37
④ 内的状態・感覚を表現	0	0	0	0	0	0
⑤ 名詞	10	5	1	1	1	17
合計	47	46	61	88	5	247

考　察

年齢別オノマトペ数について　本研究ではオノマトペ使用数は 4 歳児クラスが最も多く, 5 歳児クラスが最も少ない結果となった。また，オノマトペと成人語の併用は，1 歳児クラスと 5 歳児クラスで 1 回ずつ使用されたのみであった。村瀬ほか (2007) の研究では, オノマトペなどの育児語の使用傾向は子どもの月齢が上がるにつれて減少していた。本研究で村瀬ほか（2007）の結果と異なる結果が生じた理由として，各クラスでの観察場面が異なっていたことが考えられる。オノマトペ使用数が最も多かった 4 歳児クラスでは，観察場面で絵本の読み聞かせが行われており, その絵本の中にオノマトペが多用されていたためであったと考えられる。観察実施日に各クラスの保育士が選択した絵本や紙芝居，手遊びの種類によってオノマトペ使用数が大きく左右されたと考えられる。オノマトペ使用数が最も少なかった 5 歳児クラスでは，保育士が幼児の前で作業過程を見せながら課題を進めており，視覚的情報によって保育園児は理解しやすく，オノマトペやことばを使った

説明がさほど必要なかったために，少なくなった可能性も考えられる。オノマトペと成人語の対提示数についても，保育士は絵本や紙芝居の中に出てくるオノマトペを読むことが主であり，保育園児に対して日常会話や説明をする場面，1 対 1 で話をする場面はほとんどなかった。観察場面の影響が大きかったと考えられる。

５分類別オノマトペ数について　５分類の合計をみると，動きを表現，音を表現するオノマトペが最も多用されていることが明らかとなった。内的状態・感覚に関するオノマトペは 1 度も使用されていなかった。この結果は，幼児は音や動きを表現するオノマトペの使用が多く，内的な状態を表すオノマトペはほとんど使用しないという結果と一致している（近藤・渡辺・大田・伊藤・小津・越中，2008）。年齢別クラスの名詞使用数をみると 1 歳児クラスが最も多い結果となった。乳幼児の言語発達に焦点を当てると，1 歳前後は初語が出現し，ものとことばとの対応を学んでいく時期である。また，研究 2 の結果から 2 歳でオノマトペと成人語の併用への移行が始まるため，1 歳児クラスを担当する保育士はものとことばとの対応，つまり一般語彙の獲得を目指して 1 歳児に対してオノマトペを名詞的に使用していた可能性が考えられる。

保育士が使用したオノマトペと保育園児の反応について　保育士が絵本の読み聞かせや手遊び以外で使用していたオノマトペは，オノマトペのみではなく，動作も併用して話し掛けていた。例えば，1 歳児クラスおよび 2 歳児クラスのおやつの時間に「ポン」と言いながら両手を合わせる動作を見せていた。また，「ムキムキしてよ」と言いながらおやつの包み紙を剥く，「おロフキフキしてよ」と言いながら口の周りを拭くといった場面がみられた。2 歳児クラス及び 3 歳児クラスでは，静かにするよう促す「シー」の際に指を唇に付ける動作も一緒に見せながら伝えていた。5 歳児クラスでは，「真ん中でピッタリくっつくように折ります」と保育士は，保育園児におりがみの折り方を実際に見せながら説明していた。これらのオノマトペに対して保育園児は，おやつの包み紙を外す，口の周りを拭くなど，どのクラスにおいても保育士の用いたオノマトペの意図を理解している反応を示していた。これらの結果は，原子・奥野（2007）の報告と一致している。本研究でも保育士はものの操作や体の動かし方を伝える際に，具体的に伝わりやすいようにオノマトペを使用していたと考えられる。保育士がオノマトペと動作を併用することによって保育園児は何をすべきか，どのようにすべきかが伝わりやすく，保育士の意図を理解しスムーズに活動できたと考えられる。

総合考察

研究 1 でオノマトペの使用頻度は 2 歳でピークに達すること，意味理解度は年齢が上がるにつれて進むことが示唆された。研究 2 でオノマトペから成人語への移行は 2 歳頃から始まること，年齢が上がるにつれて成人語の使用頻度は増え，オノマトペの使用頻度は減ることが明らかとなった。研究 3 は，保育園児の約 8 割が揃って活動する一斉保育活動場面を対象とし，オノマトペと成人語の使用を目的とし保育士と担当児との関わりを観察し，4 歳児クラスで保育士のオノマトペ使用頻度が最も多い結果となった。この結果は，研究 1 と研究 2 のオノマトペ使用に関する調査結果と矛盾していた。その理由として，観察した一斉保育活動場面であった「絵本の読み聞かせ」で使用した 2 冊の絵本にオノマトペが多用されていたことが考えられた。絵本や紙芝居，手遊びなどの一斉保育活動場面以外で保育士がオノマトペを使用する際にオノマトペと同時に動作もつけて話し掛けており，保育園児も何をすべきか保育士の意図を理解している様子が観察された。日常生活場面にお

いて言語発達途上にある乳幼児は，名詞，動き・音・状態・感覚を表現するときにオノマトペを使用する。乳幼児の周囲の大人は，乳幼児の年齢が 0 歳から 1 歳ではオノマトペを使用してコミュニケーションを行い，2 歳以降，成人語を使用してコミュニケーションを行うようになると言える。そのような周囲の大人の関わりの変化によって乳幼児は成人語を身につけていくと言える。

オノマトペの効用　オノマトペは，コミュニケーションの手段，思考の手段，自己の行動を調整する手段という３つの言語機能を持つ言語である（吉川，2013）。日本にはオノマトペが非常に豊かに存在し，日常の話し言葉表現や，詩や文学の書き言葉表現として頻繁に用いられている。こうした日本の言語文化の伝統に対して，西欧の言語文化では，オノマトペ表現は日本と比べてその数は限られ，日常表現としての使用頻度も非常に少ない。すなわち，オノマトペ表現は日本独特の言語文化の１つであることを認識しておくことが必要である（吉川, 2013）。高野・有働（2010）は，知的障害児の教育にオノマトペを用いることで，意味を伝えるだけでなく身体動作の微妙なニュアンスを伝えられることがわかったと報告している。介護現場で利用者や介護者の行動をオノマトペとそれに随伴する動作で表したり（細馬，2071），さまざまな動作や覚醒度のレベルなどをオノマトペで表現したり（平田・小林・福田，2018）している。医療現場における診察場面で医療者は，オノマトペを主導的に用いることで患者の発話を促進できること，患者のオノマトペ発話を意識的に注目することで質量共に高い情報収集に役立つことを述べている（植田，2015）。吉川（2013）は，スポーツオノマトペの使用の必要性について大学生アスリートのうち 63％が「必要な時だけ使えば良い」と回答し，指導者は「指導内容が理解しやすくなる」，「指導者とのコミュニケーションが良くなる」とポジティブな評価が高かったと述べている。これらのオノマトペの効用は，知的障害児，要介護者，患者，アスリートなどを対象にした研究である。一見「幼稚で」「頼りな気」なオノマトペは，日本語においてさまざまな効果を発揮するツールと言える。本研究の対象者は，大半が定型発達の乳幼児であると言える。成人語を理解し，使用することは，乳幼児の言語発達の課題である。乳幼児の指導者である保育士は，活動場面に応じ，適切にオノマトペを使用することで乳幼児の言語発達を促すことができると考える。

研究３で，4 歳児で保育士のオノマトペの使用が最も多かった。その理由として，2 冊の絵本にオノマトペが多用されていたことが考えられた。つまり，観察した内容はオノマトペの使用ではなく，活動と考えられる。今後の課題として観察時間，保育活動内容を統一して一斉保育活動場面を複数回観察すると共に，自由保育場面での保育士と乳幼児のやり取りを観察する必要があると考える。また，研究３の各年齢クラスの保育士数と乳幼児数の関係から保育士が加配されているクラスがあり，何らかの発達上の問題を有する乳幼児が入所している可能性がある。何らかの発達上の問題を有する乳幼児に対して保育士がオノマトペを含むどのような言葉掛けをしているかを個別に観察することで，さらに保育士がオノマトペの効用をどのように考えて対応しているかを明らかにできると考える。

引用文献

藤野良孝・井上康生・吉川政夫・仁科エミ・山田恒夫 (2005)　運動学習のためのスポーツオノマトペデータベース. 日本教育工学会論文誌，29, 5-8.

原子はるみ・奥野正義 (2007) 保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察．北海道教育大学教育実践総合センター紀要，**8,** 167-174.

平田佐智子・小林秀・福田升二 (2018) 介護記録の自由記述に含まれるオノマトペと要介護度の関係. 人工知能学会全国大会論文集（第 32 回）, 3B1-OS-22a-02 1-4.

細馬宏通 (2017) 介護活動を表現するオノマトペ 人工知能学会研究会資料, 25-28.

石橋尚子 (2007). 発達にいかす 丹野眞智俊（編著）, オノマトペ《擬音語・擬態語》をいかす : クオリアの言語心理学（pp.31-57）京都：あいり出版.

吉川政夫 (2013). 運動のコツを伝えるオノマトペ バイオメカニズム学会誌, **37,** 201-220.

小林春美・佐々木正人 (1997) 子どもたちの言語獲得. 東京：大修館書店.

近藤 綾・渡辺大介 (2008) 保育者が用いるオノマトペの世界. 広島大学心理学研究, 8, 255-261.

近藤 綾・渡辺大介・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治 (2008) 保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査. 幼年教育研究年報, **30**, 113-119.

厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf (2021/4/16).

文部科学省(2008). 幼稚園教育要領解説. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf(2015/1/18).

村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (2007). 養育者における育児語使用傾向の構造と育児語使用を規定する要因 社会文化論集：島根大学法文学部紀要社会文化学科編, **4**, 17-30.

村田孝次 (1977). *言語発達の心理学*. 東京：培風館.

小田 豊・芦田 宏 (2013). 保育内容 言葉：保育の内容・方法を知る. 京都：北大路書房.

小椋たみ子 (1999). 初期言語発達と認知発達の関係. 東京：風間書房.

小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬俊樹 (1991). 初期言語発達インベントリー信頼性の検討 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学, **25**, 17-31.

小椋たみ子・村瀬俊樹・山下由紀恵. (1992). 初語言語発達に関する調査(1)：幼児語から成人語へ. 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学, **26**, 57-63.

大久保愛 (編著) (1981). 保育言語の実際. 東京：建帛社.

小学館大辞泉編集部(編) (2012). 大辞泉第 2 版. 東京：小学館.

高野美由紀・有働眞理子 (2007). 重度知的障害児への教育的支援におけるオノマトペの貢献. 学校教育学研究, **19**, 27-37

高野美由紀・有働眞理子. (2010). 養護学校の教師発話に含まれるオノマトペの教育的効果 特殊教育学研究, 48, 75-84.

田守育啓 (2002). オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ. 東京：岩波書店.

田中友香理 (2012). 乳児期におけるクロスモーダル知覚の発達：オノマトペ獲得との関連から. 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 540.

丹野眞智俊 (2005a). オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える. 京都：あいり出版.

丹野眞智俊 (2005b). 幼児の使用する日本語オノマトペの音韻分析. 神戸親和女子大学児童教育学研究, 24, 1-6.

植田栄子 (2015). 診療コミュニケーションにおける擬音語・擬態語の使用傾向と効果的運用について. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌, 6, 53-67.